

1. はじめに

最近、本校学区でアジア系の外国人労働者をよく見かける。企業の送迎バスを待っていたり、アパートから作業服で職場に向かっていたりする。また、紡績工場や反毛工場などで仕事をしている姿を見ることもある。生徒の中には、外国人が「軍手工場で働いていた」、「隣のアパートに住んでいる」などと話す者もいる。そこで、外国人労働者に対してどのような意識を持っているかをアンケート調査したところ、資料1のような答えが返ってきた。

＜資料1＞生徒の外国人労働者に対する意識

- ・近くの工場で外国人が働いている。夜とか歩いていたりして、少し怖い。親も気をつけなさいと言っている。
- ・私がよく行くお店の外で、ベンチに座っていたり、こっちをにらんできたりするのすごく怖いと思います。少し、お店に入るのをためらってしまいました。
- ・外国人が多いけど、日本で犯罪とか多く起こさないで欲しい。

これを読むと、生徒たちが、外国人労働者に対して不安や恐れを感じていることがわかる。こうした感情を抱くのは、外国人労働者の実態を知らなかったり、報道を聞きかじりして「外国人＝犯罪」などという単一的なイメージができあがってしまったりしているからであろう。こうした意識は、差別や偏見、排斥へとつながりかねない。大変気がかりな点である。

現在、日本では高学歴化や労働についての意識の変化によって、製造工場など労務系の職場で働く若者が減少している。また今後、少子高齢化が進んで人口が減少し、労働人口も減っていく。こうしたことから、今後も外国人労働者は増加していくことが予想される。この、外国人労働者増加の実態と生徒の意識とのズレを解消していきたい。そして、外国人労働者との共生のあり方を考えさせていきたい。本実践は、このような願いとねらいをもって取り組んだ。

2. 抽出生徒と単元計画

生徒がどのような認識を育むことができたかを検証するため、資料2のように、生徒Aと生徒Bの2名を抽出生徒とした。

＜資料2＞抽出生徒

生徒A： 事前調査では「日本が住みやすいから来ていると思うので、外国人が増えても別にいいと思う」と外国人労働者の増加に肯定的な考えを書いた。ただし、肯定する理由を見ると、自分との関わりをあまり考えずに、他人事としてとらえていることがわかる。見学や聞き取り調査、一人調べによってこの問題を自分にも直接関わってくることでありととらえさせ、その上で共生のあり方を考えさせていきたい。

生徒B： 「ちょっと外国人は怖いイメージがある」、「強盗とかするような外国人は日本にいてほしくない」と事前調査で書いていて、外国人に対してマイナスイメージを持っている。外国人労働者の実態や増加の背景を具体的にとらえさせていく中で不安を取り除き、共生のあり方を考えさせていきたい。

尚、単元計画は2ページのように考えた。

3. 授業の実践

(1) 身近でアジア系外国人がたくさん働いているんだな＜第1時＞

授業に入る前に、「外国人が働いているのを見たり聞いたりしたことがあるか」という調査を本学級の生徒に行った。その結果、「見聞きしたことがある」生徒が67%と約7割いることがわかった。導入では、この資料をグラフ化して配布した。配布されたグラフを読み取って、生徒Bは「こんなにたくさんの子が、外国人労働者を見ているんだね」とつぶやいた。そのつぶやきを取り上げながら、「具体的にどこでどんな外国人が働いているのを見聞きしたか」と問い返した。

資料3はその時、抽出生徒が発表した内容である。特にこの中の、生徒A「今原紡績で仕事をしていた」という発言をきっかけに学級が沸いた。そして、その外国人は「ブラジル系だった」、「いや黒人でパーマをかけたような髪型だった」などと関連する発言が他の生徒から続いた。この今原紡績は、男川小学校の近くにある紡績工場である。男川小学校出身の生徒の多くが、登下校の際、そこで外国人が働いているのを目にしている。その際に話しかけられた者もある。その経験がもととなって、発言が続いたようである。これによって、男川小以外の小学校出身生徒も、そこはどんな工場でどんな人が働いているのかと、興味を広げていった。

最終的に計26の事例が発表された。発表されたことを書いた黒板を見て生徒Aは、「身近で外国人がたくさん働いているんだな。特に、アジア系の人が多いんだな。」と感想を述べた。本時はこの言葉をまとめとして板書した。

＜資料3＞「外国人労働者を見た経験」(第1時の発表より抜粋)

- 今原紡績で仕事をしていた。(生徒A、他に6名の生徒が関連発言)
- 中華料理店で中国の人が働いていた。(生徒A)
- ユーストアでアメリカ系のような人が買い物をしていた。(生徒A)
- 焼き肉屋に韓国人がいた。(生徒B)

＜資料4＞第1時の授業日記に書かれた抽出生徒の疑問

- なぜわざわざ、言葉も上手に話せない日本に働きにくるのか不思議に思いました。不景気でいつリストラされたり、働いている店や会社がいつ潰れたりするかもわからないのに。(生徒A)
- なぜわざわざ日本に来て「焼き肉屋」をやったり、キムチを売りに来たりしているのだろうか。でも、こんなにたくさんの人が働いているとは思わなかった。(生徒B)

授業日記に抽出生徒は資料4のように書いている。生徒A、生徒Bともに「なぜわざわざ」日本に働きに来ているのかと疑問を抱いた。

(2) なぜ日本を選んだのかな＜第2時＞

前時の授業での疑問を発表するところから第2時の授業を始めた。抽出生徒の発表内容は資料5の通りである。こうした疑問の発表の後、「クラス全体の追究の問いをどうするか」と投げかけ、意見交換をした。そして、「なぜ、日本でアジア系外国人がたくさん働いているのか」と追究課題を決めた。

＜資料5＞第2時で抽出生徒が発表した疑問

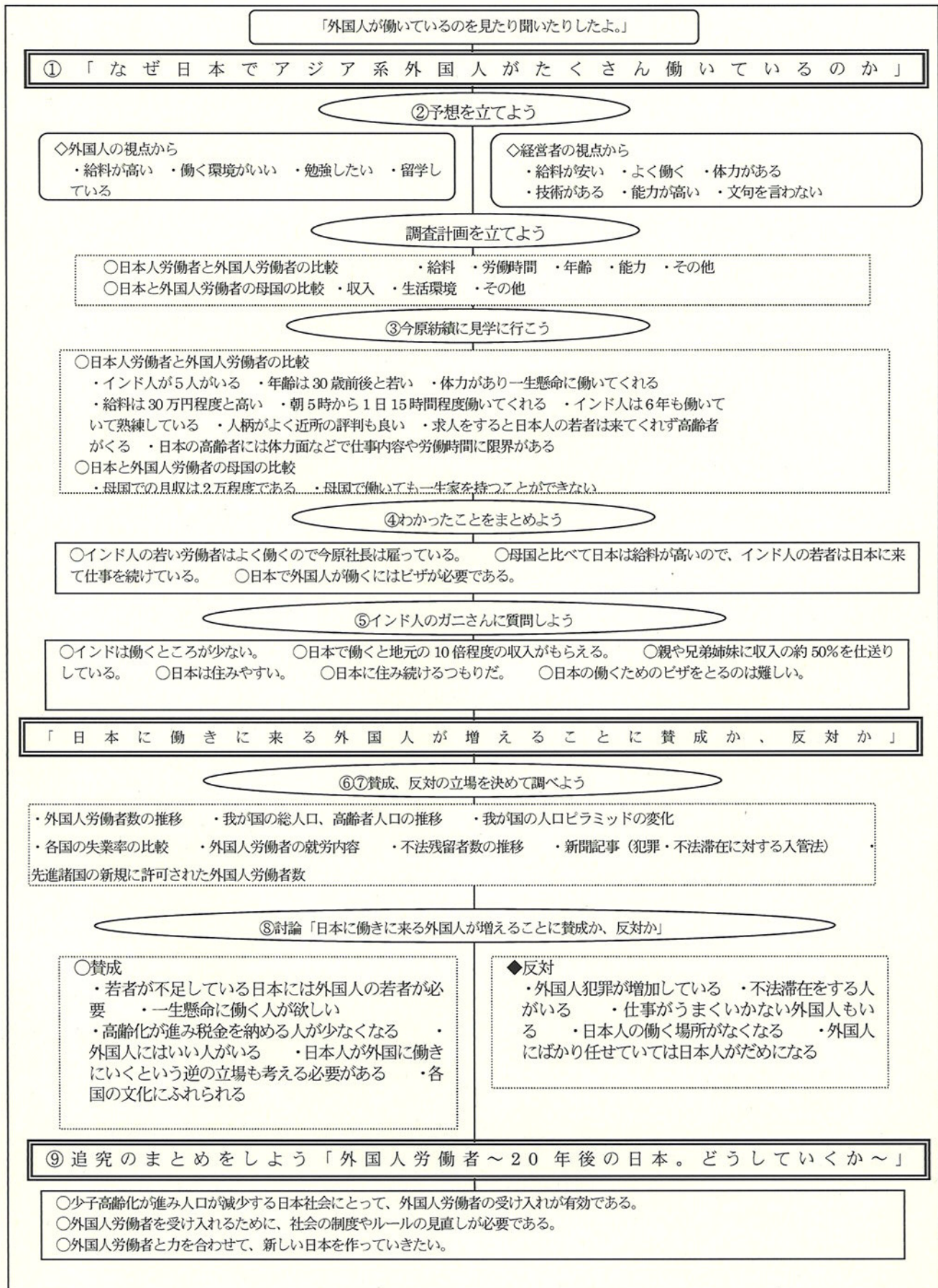
- なぜ働く場所として日本を選んだのか。(生徒A)
- なぜ、日本に来てまで焼き肉やキムチを売っているのか。(生徒B)

単元目標と第二次単元計画（9時間完了）

◇単元目標

- ①身の回りの外国人労働者の存在に気づき、その増加の理由を意欲的に調べることができる。
- ②工場見学と一人調べをもとに外国人労働者増加の理由を外国人側と日本側の2つの視点から考えることができる。
- ③外国人労働者増加の是非を討論することによって、外国人労働者に依存している日本社会の現状と受け入れのための社会制度整備の必要性を明らかにすることができる。
- ④外国人は母国と比べて高給を得られるので来日して仕事を続けていること、経営者は人手不足と外国人労働者が日本人よりも一生懸命に働くので雇っていることを理解することができる。

◇単元計画



続いて、追究課題に対する予想をノートに書かせ、発表させた。抽出生徒は、資料6のような予想を発表した。

＜資料6＞抽出生徒の予想

- 日本は生活しやすく、アジアの中では先進国だから。日本の方が生活するのに便利だから。(生徒A)
- 日本は世界でも豊かな国だと思うから、仕事が見つかるんじゃないかと思って働きに来ていると思う。日本の物価は高いから、日本の五千円がフィリピンなどでは一ヶ月十分暮らせるくらいの大金だときいた。日本で仕事をして、母国の家族にお金を送っていると思う。(生徒B)

生徒Aは、生活の利便性と先進国である日本の経済的發展に目を向けた。生徒Bは、高い収入と仕事を求めて来ていると考えた。さらに、その収入は家族に送金していると予想した。生徒Bはここで「焼き肉屋」と「キムチの販売」から、発想を広げていくことができた。

発表が一段落したところで、「予想が合っているかどうか確かめたい」と生徒から声が上がった。そして、「外国人が働いている工場に見学に行きたい」などの案が出たので、見学に行くことに決めた。この時、生徒Aから「見学に行くなら今原紡績がいい」という意見が出された。他の生徒も、生徒Aの提案に積極的に同意した。こうして、今原紡績に見学を依頼することとした。

本時の最後には、「今原紡績に見学に行つて質問したいこと」をノートに書かせた。抽出生徒は資料7のように書いた。これを見ると、外国人労働者への質問ばかりであることがわかる。外国人側の事情、背景についての興味関心が高いことは他の生徒も同様であった。

一方、雇う日本人側への質問はほとんどなかった。教師側としては、雇う日本人側の事情、背景という視点も持たせたかった。そこで見学前に臨時に学級の時間を利用して「今原紡績の社長さんに質問したいこと」をノートに書かせた。

これによって、資料8にあるような問いが子どもたちの中に生まれていった。ただこの時点では、「今まで何かトラブルなどがあったか」という生徒Aの言葉が象徴しているように、外国人を「働かせる」と困ったことになるというマイナスイメージを持っている生徒が多かった。このマイナスイメージを見学によって覆したいと考えた。

＜(3) 外国人労働者のイメージが変わったよ＞第3時＜

第3時は、今原紡績の見学に行った。初めに工場の中の見学をさせてもらい、紡績の仕事、岡崎の地場産業としての紡績業についてなどの説明を受けた。見学の後、生徒が社長さんに質問をした。資料10はその質問記録の一部である。

生徒Bの質問(1)によって、従業員の3分の1もが外国人であることがわかった。この点については他の生徒が追加質問をし、5人はすべてインド人で、20歳代から30歳代の若者であることもわかった。

さらに、生徒Aの質問(5)で外国人のほうが日本人より一生懸命に働くことがわかった。加えて社長さんの口から、「日本人の若者はこういう仕事をしようとしなくて人手不足になる」、「日本人の若者と比べて思いやりもありいろいろ相談できる」といった話も聞くことができた。また、外国人の給料の方が安いと思って質問した生徒に対して「給料は日本人と同じです。むしろ長時間一生懸命に働くので普通の日本人よりたくさんあげています」とも答えてくださった。この回答には、多くの生徒が驚きの声を上げていた。この見学を終えて、抽出生徒は資料11のように見学日記を書いている。

「そんなに熱心に働いているとは思わなかった」(生徒A)、「ガニさんの努力がすごいと思った」(生徒B)と、二人は自分のイメージと違う外国人労働者の姿を知つて、大変驚いていた。特に、事前調査で「外国人は怖いイメージがある」と書いていた生徒Aは、「外国人のイメージが変わりました」と、

＜資料7＞今原紡績の見学で質問したいこと

- 生徒A
 - ・日本に来た理由。
 - ・日本に来て思ったこと。
 - ・日本は母国と比べてどうなのか。
- 生徒B
 - ・なぜ日本に働きに来ているのか。
 - ・日本で働き始めてどのくらいか。
 - ・日本での生活はどうか。
 - ・日本語はどうか。

＜資料8＞今原紡績に見学で社長さんに質問したいこと

- 生徒A
 - ・なぜその人を雇ったのか。
 - ・その人は他の従業員と比べてどうか。
 - ・今まで何かトラブルなどがあったか。
- 生徒B
 - ・外国の方と話は通じますか。
 - ・何人くらいの外国人がいますか。



＜資料9＞今原紡績で見学と質問をする生徒

＜資料10＞今原紡績での見学質問記録(抜粋)

(1)	生徒B	何人くらいの外国人の人が働いていますか。
(2)	社長	うちの会社は、全従業員15人のうち5人が外国人です。
(5)	生徒A	外国人の人は日本人に比べてどうですか。
(6)	社長	外国人の人は日本にお金を稼ぎに来ている。(略)だから、すごく仕事を一生懸命にやる。
(11)	生徒A	今まで何かトラブルはありましたか。
(12)	社長	ありました。日本という国は、外国から働きにくることを嫌がる。(略)日本に来る中でビザというものがある。例えば、日本に旅行に来るのに3か月のビザがもらえる。(略)みんな観光では来るけど、実際はそうではない。だから私の所でも、最初インド人を使った時にもそれを知らなくて、3か月が過ぎてビザが切れて、要するにオーバーステイになったから私が、入管に行っているんことをきちんとするから使わせてくれといった時に、入管とトラブルになったことがある。(略)

＜資料11＞今原紡績の見学日記

- 外国人がそんなに熱心に働いているとは思わなかった。言葉の問題も勉強して克服するなんて、僕たち日本人にはなかなかできない。働く場所を日本にした理由とビザのことについてよくわからなかった。(生徒A)
- ガニさんの努力がすごいと思った。もっと日本でも、ビザを3か月とかではなくて、長くいていいですよっていうのを出してあげたい。外国人のイメージが変わりました。(生徒B)

て、大変驚いていた。特に、事前調査で「外国人は怖いイメージがある」と書いていた生徒Aは、「外国人のイメージが変わりました」と、

その気持ちの変化を書いている。

一方、新たな疑問が生徒の中に生まれていった。「ビザ」の問題である。生徒Aは、今原社長と外国人労働者との間のトラブルを想定して「何かトラブルはありませんでしたか」と質問(11)をした。ところが、社長さんは、外国人労働者とのトラブルではなく、「入管」とのトラブルについて話してくれた。この話がもとになって、生徒Aと生徒Bはともに、ビザについての疑問や意見を見学日記に書いている。このビザの問題を考えていくと、外国人労働者受け入れの制度面の視点もできると考え、追究の柱の一つにしていこうと考えた。

(4) ビザの制度はどうなっているのか<第4時>

第4時には、今原紡績の見学と質問でわかったことを発表し合った。その後、新たに生まれてきた疑問を発表しあった。その中で生徒Bは資料12のように発言した。

<資料12>第4時に生徒Bが発表した新たな疑問

「観光目的で3か月のビザを取る人が多いようですが、本当は働くために来ているようです。もっと長い期間、働くためのビザはとれないのか、疑問に思いました」

この発言には多くの生徒がうなずいた。また、第2時で考えた外国人労働者への質問もできないまま残っていた。そこで、それらを是非、直接質問したいと生徒たちが言った。そこで、今原紡績のインド人労働者のガニさんを教室に招くことに決めた。

(5) 日本で外国人が働くのは難しいことなんだな—ガニさんへの質問—<第5時>

第5時は、ガニさんを教室に迎えて質問をし、聞き取り調査を行った。ガニさんは来日7年目。日本語も話すことができ、生徒の質問に丁寧に答えてくださった。

抽出生徒Bは、最初に資料14の(1)のように「なぜ・・・」と質問した。この生徒Bの質問によって、母国インドでは仕事が無く、もし見つかったとしても給料が安いことなどがわかった。さらに関連の質問が出され、日本はインドの10倍程給料がいいことなどもわかった。また、ガニさんはインドに帰らずに日本に住み続けるつもりであることも明らかにできた。これについて、生徒は想定外だったため追加の質問をしなかった。教師側も、この点を上手に取り上げれば、社会制度のあり方について考えていけるのではないかと考えた。しかし、ビザや日本での就労についての関心が高まっている中で、無理にそちらにもっていくのは子どもの意識を絶ってしまうと判断し流してしまった。



<資料13>ガニさんを教室に迎えて質問をする

<資料14>ガニさんへの質問記録(抜粋)

(1)	生徒B	なぜ今原紡績で働こうと思ったのですか。
(2)	ガニ	(略) 大学を出てもなかなか仕事も見つからない。仕事見つかったとしても、給料が安い。それから兄弟達も多い。それで生活するのが苦しい。それで、日本に来て、今原紡績に友達で紹介で働きました。
(14)	生徒B	日本に住み続けるっていつてくれたんですけど、年に何度かはインドに帰ることはありますか。
(15)	ガニ	あります。2年、3年で一回くらい。お母さんに会いに行く
(45)	生徒A	この前、今原紡績に見学に行った時、社長さんが「ビザのことで問題があったって言った」のですが、それはどういうことですか。
(46)	ガニ	それは、社長さんがやりました。ビザはないとインドに帰らなくてははいけない。また、帰ると戻ってこれない。

授業の後半には、生徒Aがビザのことを(45)のように質問した。そして、日本では外国人が働くための許可がなかなかおりないことを知った。

本時を終えて、抽出生徒は資料15のように授業日記に書いている。生徒Aは、日本ではビザの発給によって外国人労働者の数を厳しくコントロールしているということをつかんでいった。一方、生徒Bは、ガニさんが出稼ぎ型労働者ではなく、定住型労働者であったことに驚いている。また、ガニさんの誠実な人柄に触れ、「すごくいい人」との印象を持った。この実感は、この後外国人労働者の問題を考えていく上で、生徒Bの大きな財産となっていく。つまり、「外国人労働者」を実態が不明確なひとくくりの集団にとらえるのではなく、ガニさんのような一人一人の人の集まりであると考えようになったのである。

<資料15>第5時の授業日記

- 外国で働くということが難しいことだということがわかった。だけど、給料がかなり違うところもあるなら、将来は、一番給料がいい国で働くしかないな。(生徒A)
- もうずっと日本にいと聞いて、びっくりしました。とても住みやすいし、やさしいと言ってくれてうれしく思いました。インドはすごい人口が多く大変なんだと思いました。家族思いのすごくいい人だなと思いました。(生徒B)

(6) 外国人労働者の増加について一人調べをしよう<第6・7時>

ある生徒が「社長さんは、日本に働きに来る外国人が増えることに賛成か、反対か聞いてみたい」と、第4時の授業日記に書いてきた。この問いかけは、単元後半の討論の論題としてふさわしいと考えたので、本時の初めに全員に紹介した。すると、他の生徒からは「私は賛成です」とか、「私は増えるのはいいやです」という反応が返ってきて盛り上がった。そこでこの論題について、討論していくことにまとまっていた。そして、討論を充実させるために、一人調べを進めることとした。

一人調べに入る前に「反対」と意思表示したのは、2人だけであった。この状態で討論が成立するのかと心配になった。ところが、外国人労働者に関する統計資料を集めた全9ページの「外国人労働者に関する資料集」(教師自作)を配布し、一人調べが始まると、反対派が2名から14名へと多くなった。これは、賛成派を揺さぶるために意図的に入れた「外国人犯罪」や「不法残留者数」などの資料の影響が大きかった。これによって、不安や怖さを強く感じた生徒が反対派に流れていった。

生徒Aは「反対」の立場をとった。その理由は資料16の通りである。

<資料16>反対の立場をとった生徒Aの理由

- ・日本は不景気で、人を必要とする会社が少ない。失業率も低くない。
- ・日本にいる外国人の4分の1以上は不法残留者です。
- ・外国人犯罪が年々増加しているようです。つまり、日本に働きに来てもうまくいかない人は多い。それで犯罪をしてしまう。外国人のせいで治安が乱れたらどうするか。

生徒Aは、当初から持っていた「日本は不景気」という視点から、「失業率」の資料を取り上げている。また、犯罪の増加による治安の悪化も反対の理由に加えている。反対派は全体的に、生徒Aに見られるように、日本人の働く場所がなくなる、犯罪が心配という視点で理由をあげている生徒が多かった。

生徒Bは賛成の立場をとった。その理由を資料17のように書いている。特に最初に、「外国人犯罪が過去最多」という資料を取り上げ、「日本人の犯罪が少ないわけではない」、「外国人＝犯罪が多いなどのイメージがあるかもしれないが、みんながみんなそうではない」と冷静にとらえている。

＜資料17＞賛成の立場をとった生徒Bの理由

- ・外国人犯罪が過去最多と出ているので、みんな「やっぱり外国人はだめだ」と思うかもしれないけれど、かといって、日本人の犯罪が少ないわけではない。
- ・「外国人＝犯罪が多い」などのイメージがあるかもしれないが、みんながみんなそうではない。
- ・社長さんは、「外国人だから」といって差別した扱いをしていない。
- ・国の間で貧富差がなくなるといい。
- ・日本の若い人がやりたがらない仕事でも外国人はお金のためなら文句言わず一生懸命働く。
- ・外国人だから言語でもハンディキャップはあるけれど、ガニさんのように早く言葉の壁をなくそうと努力する外国人もいる。
- ・日本人は外国で犯罪しないのか？？！

生徒Bがこのように考えるようになったのは、第3時の見学後「イメージが変わった」と認識を成長させることができたこと、第5時にガニさんに直接質問することができたことの結果であろう。ここから「差別」を防ごうとか、「貧富の差」をなくそうという道義的な視点からも考えるようになってきている。他の賛成派の生徒も、生徒Bに見られるように、見学や質問などでわかったこと、道義的視点から判断していることが多かった。

討論に向けて、教師側としては資料18のように支援の方針を立て、助言やノートへの朱書きを行った。

＜資料18＞討論支援のための教師メモ

◇生徒Aをはじめとする反対派に対して指導していきたいこと

犯罪増加などの限られた資料をもとに意見を固めていることが多い。こうした生徒には、見学や聞き取り調査で実際に自分の目と耳と肌で感じたこと、他の資料も考慮に入れて、広い視点で考えていくように指導していきたい。

◇生徒Bをはじめとする賛成派に対して指導していきたいこと

賛成派は、見学や質問でわかったこと、肌で感じたことをもとに情緒的、道義的に判断していることが多い。したがって、統計資料も活用して、外国人労働者の増加によってどのような利点があるか、問題点はどのように克服していけるかを考えていくように指導していきたい。

(7) 討論「日本に働きに来る外国人が増えることに賛成か、反対か」＜第8時＞

討論は、生徒Bの「外国人の若い人は文句を言わず一生懸命にやってくれる」という賛成意見から始まった。賛成派は、それに加えて「日本人が働かなくなったから仕事が余っている」ということを主張した。

一方反対派は、「仕事を外国人にやってもらって任せてばかりでは、日本人がだめになる」、「働く場所が今はとても少なくなっている」という点を主張した。その中で、生徒Aは、「求人倍率」の資料から日本人の働く場所が少ないことを述べている。その様子は資料19の授業記録のからわかる。

＜資料19＞討論の前半の様子

(1)	教師	今からは生徒Cさんから出された論題「日本に働きに来る外国人が増えることに賛成か、反対か」について討論していきます。
(2)	生徒B	私は賛成です。日本人の若い人ではなかなかやりたがらない仕事でも、外国人の若い人は文句を言わず一生懸命にやってくれるから、外国人は増えてもいい。
(3)	S1	私は反対で、若者がやりたがらない仕事を外国人にやってもらって任せてばかりでは、 <u>日本人がだめになる</u> ような気がします。だから、反対です。
(5)	S3	反対で、付け加えなんですけど。外国人が増えていくと、 <u>日本人の働く場所が少なくなる</u> からです。
(6)	S4	反対で、S3の意見に付け加えなんですけど、日本人でも働く場所がなく、職がない人がいるからです。
(7)	S5	S4に反対で、日本人の働く場所が少なくなるというのは、 <u>日本人が働かなくなったから仕事が余っていて、だから外国人が来るんだから、そんなことを言うなら日本人はもっと働きやすい</u> と思う。
(8)	生徒A	S5さんの意見に反対で、働くところが余っているとっていましたが、資料Dを見てください。これは、 <u>求人倍率</u> だけど、これを見ると、 <u>働く場所が今はとても少なくなっている</u> ことを表しています。だから、働く場所は余っていないくて、日本人も苦しい状態なので、あんまり増やしてはいけないと思います。

続いて討論の柱は、「外国人犯罪」のとらえ方に移っていく。反対派が「外国人犯罪が過去最多と書かれていて、年に4万件も起きてい

＜資料20＞討論の中盤の様子

(11)	S7	ガニさんと今原社長さんからの話から、外国人にもいい人がいると思うのですが、この資料Qを見ると外国人の犯罪が増えていて、だから、反対です。
(12)	生徒B	外国人犯罪が増えていて、日本人が犯罪を犯しているのも増えていてと思うし、日本人が海外で犯罪を犯していないとは思わない。外国人日本人関係なく悪い人はちゃんと処罰すべきだし、いい人は迎えるべきだと思う。
(13)	S8	反対で、資料Qを見ると、外国人犯罪が過去最多と書かれていて、年に4万件も起きているから。

るから」と強く主張していく。

それに対して、賛成派の生徒Bは、「外国人犯罪が増えているけど、日本人が犯罪を犯しているのも増えていると思うし、日本人が海外で犯罪を犯していないとは思わない」と、冷静にその事実を受け止めることを主張した。この様子は、資料20の授業記録からわかる。

犯罪に対する議論は、最終的には感情的なものが優先してしまう。今回の論題を考える上で重要な要素ではあるが、これ以上時間をかけても深まらなないと考えた。そこで一旦、討論を中断し、考える時間を与えた。これによって、自分が調べてきた事実を思い出させ、視点を広げさせたいと考えたからである。

＜資料21＞討論の後半の様子

(24)	教師	では、ここで一旦相談する時間をあげよう。(約2分) では相談をやめて。どうですか。
(25)	S9	(略) 日本人はどんどん高齢化していて、高齢者がどんどん増えていて、働ける若い人が減ってきている。(略) 1930年は、成人12人で1人のお年寄りを助けなければならないという割合だったけど、1999年では成人2.5人で1人のお年寄りを助けなければならないようになってしまっている。ぼくたち賛成意見の人は、ここに外国人を加えて、1人のお年寄りを助ける割合を増やしていこうという考えです。(略)
(26)	生徒B	話がちょっとずれるけど、もし、日本から外国人がいなくなったら、いろんなところで困ると思う。例えば、スポーツの野球とかでも外国人選手は欠かせない。それに、英語は世界で通用するけど、英会話の塾にいても外国人の先生がいて直接教えてくれる。文化や外国の考えなんか外国人がくることによって一緒に来るから、いろいろ発展していけると思う。

再開直後の討論の様子は資料21に示した。S9が、高齢者の増加と若者の減少に対応するためにも外国人労働者が必要と主張した。続いて生徒Bが、「文化や外国の考えなんか外国人が来ることによって一緒に来るから、いろいろ発展していけると思う」と文化面の発展という視点で意見を述べた。賛成派は、少子高齢化、文化の発展という視点を新たに理由としてあげていった。こうしたところで50分が過ぎ、討論を終了した。

授業終了後、生徒Aは「賛成派の意見もなるほどと思えたり、反対派の意見でその通りだと思ったりして、外国人が増えることについて深くいろいろな方向から考えることができました。」と教師に話しかけてきた。討論によって、視点を広げることができたことの満足感をこの言葉から感じることができると。そして、この成果は最後のまとめの作文に表されていくことになる。

(8) まとめ「外国人労働者～20年後の日本、どうしていくか～」を書こう＜第9時＞

単元のまとめとして「外国人労働者～20年後の日本、どうしていくか～」を書かせた。このテーマに決めたのは、自分たちに直接関わる問題として、外国人労働者の受け入れのあり方と共生について考えさせたかったからである。

討論の際に反対派であった生徒Aは、資料22のように賛成派に変わり、外国人との共生を考える方向に考えを変えていた。まず、「外国人は必要になってくる」と未来予測をしている。その上で、問題点を克服していこうと前向きな考えを展開している。さらに、「増える

＜資料22＞生徒Aのまとめ

「外国人だからこの仕事は任せられない、なんてひどい考え方の会社はないと思うので、ちゃんと日本語が話せれば、日本に働きに来ても何の問題もないと思います。(略) 日本には外国人は必要になってくると思います。悪い面をどうやって克服するか、それを考えていこうと思います。「外国人に任せては、日本はダメになる」というのを克服するには、仕事の種類を増やすのがいいと思います。「犯罪が増加するおそれがある」という問題は少し改善が難しいと思います。はっきり言うと犯罪をなくすことは不可能だと思います。(略) これから外国人労働者が増えるか減るかは僕たち次第だけど、僕は最終的には賛成派ということになりました。僕は、外国人労働者のために何かできることがあるなら、できる限り協力していこうと思います。この国のためにも、外国人を歓迎するべきです。」

か減るかは僕たち次第」と当事者・主権者としての意識を持って考えている。そして、「最終的には、賛成派になりました」とし、外国人労働者のために「協力していこうと思います」と書いている。また、賛成派の生徒Bは資料23のように書いている。

＜資料23＞生徒Bのまとめ

「私は、この先、外国人労働者はどんどん増えていくと思う。でもそれは別に悪いことではないと思う。(略) だから、いろんな国から迎入れて他の国や文化や個性を日本らしく生かしていけたらいいと思う。でも悪いことをする人は、何人であろうが悪い人。そういう人達は差別なく処罰していくべきだと思います(略) 今ある日本の大切な文化を守りながら、世界の文化も取り入れていけば最高だと思う。」

まず「外国人労働者はどんどん増えていく」と未来予測している。その上で、反対派が危惧していた犯罪については「差別なく」と道義的視点も加えながら、「処罰して」いこうと書いている。そして、「世界の文化も取り入れていけば最高だと思う」と文化の発展の視点を強調している。

4. 研究の成果と今後の課題

生徒Aは、事前調査では「日本が住みやすいから来ていると思うので、外国人が増えても別にいいと思う」と、他人事のように書いていた。しかし、学習終了後は資料22のように、当事者・主権者として自分のこととして考え、外国人労働者に対して自分も協力していきたいと考えるようになっていった。

生徒Bは、事前調査で「ちょっと外国人は怖いイメージがある」と書いていた。しかし、第3限終了後、「イメージが変わりました」と書き、基本的考えを転換する。そして討論では賛成派として意見を積極的に述べ、活躍した。さらに、最後の作文では、文化の発展という他の生徒にとって比較的関心の薄かった視点からも賛成意見を書くことができた。

＜資料24＞具体的手立て

- ①外国人労働者増加の理由を、受け入れている日本側の事情から考えさせる。＜雇っている経営者への聞き取りと工場見学＞
- ②外国人労働者増加の理由を、就労を求めて来日する外国人側の事情から考えさせる。＜外国人労働者への聞き取り＞
- ③討論「外国人労働者が増加することに賛成か、反対か」を行うことによって、外国人労働者を受け入れる場合の利点と受け入れる場合の課題を明らかにしていく。
- ④当事者意識と主権者意識を引き出すようなテーマで未来構想を書かせ、自分に関わりのあることとして共生のあり方を考えさせる。

外国人労働者増加の問題を、資料24のような具体的な手立てにもとづいて実践を行った。これによって、生徒は現状を複眼的に分析した上で未来予測をすることができた。また、現状分析と未来予測をもとに、自分たちと外国人労働者の、共生のあり方を考えていくことができるようになっていった。